

## B：「炭から見た地域課題」

安部輝幸、山田寛、上北佳凜

〈はじめに〉

私たちは、日本やマレーシアの製炭工場を訪問し、地元の炭作り職人へのインタビューを通じて、炭にも様々な種類や用途があることを学んできた。さらに炭生産を通じた地域経済や伝統産業についての理解を深めることができた。そこで、炭を巡った現代の地方におけるある深刻な問題が見えてきた。それは、流通のグローバル化が「地域の伝統と活力を失わせる」という問題である。

昔は日本や色々な地域で伝統的な産業として炭が生産されていたが、今はインドネシアやマレーシアで生産される安価なマングローブ炭が世界的に流通している。そのため、日本の菊炭や備長炭のような高品質だが高価な炭作りは衰退し、若者の目には不安定で魅力の低い産業と映ってしまい、次世代の従事者が育たなくなっている。これは、その地域から若者の姿が消え、やがて地域の衰退へと繋がる大問題である。

マングローブ炭の場合、生産地であるインドネシアやマレーシアでも、貴重なマングローブ林の破壊が急速に進んでおり、労働力が安く搾取されていて、次世代にわたって持続可能な生産活動であるとは言えない。

炭の生産と消費がグローバル化したことで、私たちは BBQ 用などの炭をいつでも多く安く手に入れられるようになったが、実はそれは地場産業の壊滅や、地域ごとにあった独特の伝統品やその手法の衰退を招きかねない。その問題の解決策を見つけ出すことを目的として研究に取り組んだ。

〈課題〉

伝統的な地場産業を守ることが地域を守ることにつながると考えられる。そして、伝統産業を守るには、地場産業や地域特有の伝統品や工芸品生産などに、持続的に活力を持たせることが必要になり、そこには「若者」の定着がとても重要だと考える。しかし、安定した収入がなければ地域に若者が集まり定着することはない。つまり、地域の伝統を受け継いでもらうと同時に経済的に安定した生活を提供する必要がでてくる。そのため、地域で上記を可能とするシステムが必要となる。

〈解決策〉

近年話題となっている「半農半 X」を応用し、私たちはここに「半炭半 X」という生活スタイルのモデルを提唱したい。私たちの課題研究では能勢の特産品である「菊炭」を取り扱う。菊炭には冬期にしか製造ができないという制約がある。しかし、この半炭半 X にはこの制約が重要である。なぜなら冬期以外は実質的に自由な時間があるので、別の仕事、つまりセカンドワークに従事することができるようになるからである。そうすると別の形の経済活動が可能になり収入を得ることも可能になる。第二の収入源を確保する余地があることで、安定した収入を得るための補完が行えると考ええる。

〈結論〉

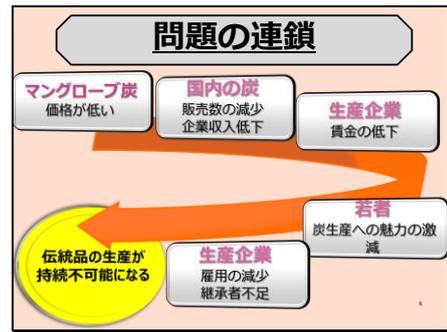
自治体が積極的に若者に対して、セカンドワークとなるような職場を提供したり、あるいはセカンドワークが行いやすい町づくりを進めたりすることができれば、経済的に安定した生活を提案することもでき、若者の定着につなげられる。そして、定着した人たちが菊炭生産に携わり、その伝統を持続的に守り、また次の世代の若者に引き継ぐといった循環が生まれれば、地域に若い人が増えるだけでなく、彼らが地域の経済を盛り上げる主体となり、それが地域の活性化につながると期待できる。

このようなライフスタイルが能勢町で広まっていけば、能勢の菊炭の伝統は活力を維持することができ、地域の経済も活発になり、能勢町は復活の道を歩んでいくことになると考えられる。

# 炭から見た 地域課題とその解決策

～地域再生への新しいライフスタイル～

(1)



(6)



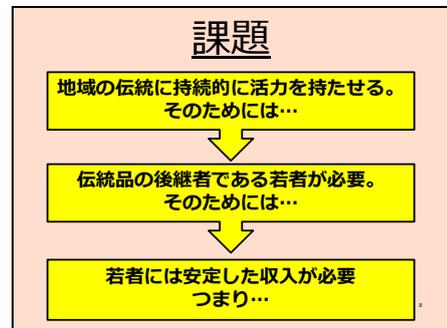
(2)



(7)

	菊炭	備長炭	マングローブ炭
原木	クヌギ	ウバメガシ	ヒルギ
マーケティング	茶人	飲食店	一般人
歴史	約400年前から、千利休などに使われる。	備中備前左衛門が、現在の和歌山県にて作り始める。	1990年代から日本に本格的に流通し始める。
用途	茶の湯	焼き鳥・うなぎ	BBO
生産地	能勢町 猪名川町	和歌山県 高知県など	インドネシア マレーシアなど
生コスト	1000円/kg	900円/kg	100円/kg

(3)、(5)



(8)



(4)



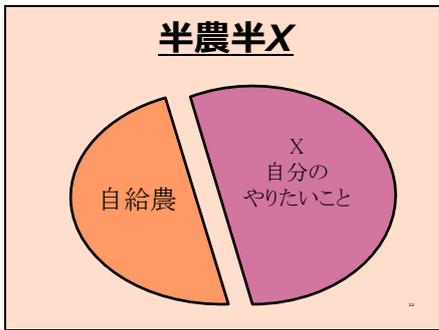
(9)

**新しいシステムの  
提案が必要である。**

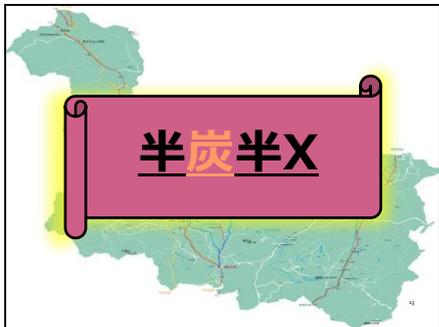
(10)



(11)



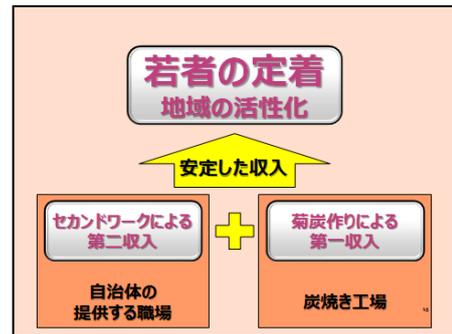
(12)



(13)



(14)



(15)



(16)